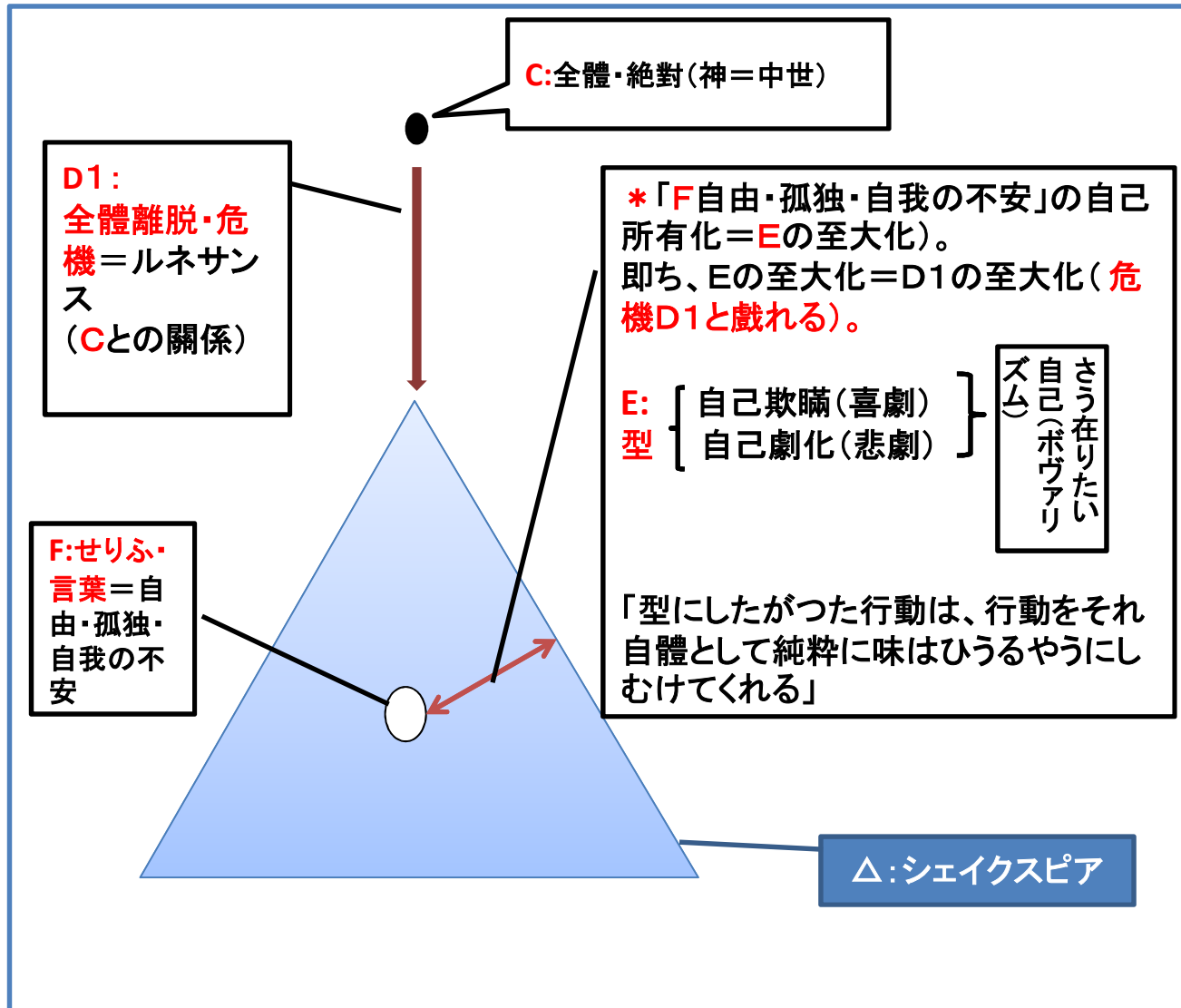


「彼(シェイクスピア)が劇場に期待したことは、危機(D1関係)から自分を救い出すことではなく、危機と戯れる(D1の至大化)ことであつた。シェイクスピアのせりふ(F)が詩でありえたのは、そしてその詩がせりふでありえたのは、彼が言葉(F)といふものを危機(D1)の表明や解決の通路としてではなく、その(F:自由・孤独・自我の不安)中に危機(D1関係)を呼び入れ、それ(危機)と戯れる(D1の至大化)ための場として把握してゐたからである」・・・とは以下図(説明は右項)の様に捉へられる。



「「せりふの中に危機を呼び入れる」「危機と戯れる」とは以下の様に換言出来る。・・・

* 場(C)から生ずる「関係(D1)」と稱する實在物(全体離脱・危機)は潜在的には一つのせりふ(F:自由・孤独・自我の不安)によつて表し得る」。故にその言葉との附き合ひ方、即ち「型にしたがつた行動」による言葉(自由・孤独・自我の不安)の自己所有化で、関係(全体離脱・危機)への適應正常(危機と戯れる)が叶へられる。(全七P300『せりふと動き』)文を利用)

~~~~~

参照文:

\* 場から生ずる「関係(D1)」と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(言葉)によつて表し得る」(全七P300『せりふと動き』)。

\* 場から生ずる「心の動き(関係)」を形のある『物』として見せるのがせりふの力學」(『せりふと動き』)。

\* この二つを合はせ要略するとかうなる。せりふ(言葉:F)との附合ひ方、扱ひ方(E)、即ち「フレイジング」「so called=所謂何々」「型にしたがつた行動」の用み方の適不適で、場との関係(D1)を適應正常化(非沈湎)させる事が可能となり、また反對に適應異常(沈湎)に陥らせる事にもなり得る。